

山の気象シンポジウム

—アブストラクト—

日時 6月19日 13時より

場所 気象庁第一会議室

1. 北アルプス硫黄岳雪崩遭難報告

国学院大学 川口 直宜

昭和44年3月17日、春山合宿中の国学院大学山岳部（一行8名）は、北アルプス硫黄岳南峰付近の小次郎谷頭で面発生新雪表層雪崩に遭い、5名がデブリに埋没し死亡した。この事故について当時の気象状況、雪崩の原因、事故処理の状況等について報告する。

2. 増毛山群^{しよかんべつ}「暑寒別岳の気候景観」

京王学園 小岩 清水

1968年、北海道西部暑寒別岳（1491m）の植生偏形樹による気流、残雪等主として気候の影響下に形成された自然状況を調査した。北海道の山岳は本州の山岳に比較して、花の様子が美しいという。その差はたしかにあり、それは主として気候によるものである。気候変化が急激に生じ植物もまた急激に開花する。注目に値するのはお花畑になっている所は過去の気候によって形成された特異地形の雪窟であって、これらの古い雪窟と現在形成されつつある新鮮な雪窟の関係も興味あるので報告する。

3. 大嶽山に代表される奥多摩の山の気象

日本大学 斎藤 哲雄

大嶽山で行なった2年間の気象観測資料をもとにして奥多摩の山の気象概観をのべる。今回は奥多摩の気象変化を気温を中心とし、東京の気温と比較しながら山の特異な現象と思われる点を検討してみたい。

4. 気象衛星からみたヒマラヤ山域の気象

気象研究所 飯田睦治郎

1967年におけるエッサ気象衛星写真、ヒマラヤ山域内80地点（山岳観測所）の観測値および数地点の上層観測値を用いて、風、雲、雨量、気温（高度6,000米）の季節変化の模様を示すとともに、モンスーン期と梅雨前線

との関係を検討する。また、プレモンスーン アタック時とポストモンスーン アタック時の気象状況を比較検討する。

5. 立山の吹雪

気象研究所 大井 正一

昭和45年11月22日～28日文部省登山研修所において大学山岳部リーダー講習会を行なった。25日は日本海に低気圧が発生して立山では著しい絹雲が見られた。26日4時に猛吹雪の中をわれわれは下山したが、この際スキーヤーが1名凍死した。29日にはスキー客33名がホテルに閉じこめられこれらのうち同志社大20名中の7名は遅れて行動して消息を断ち死亡と推定された。昭和46年春の連休にも未だ発見されていない。この時の気象について説明する。

6. 富士山の植物と環境

気象研究所 三寺 光雄

富士山の植物や地質、気象については、幾つかの研究がある。しかし生態学的観点からの研究はなかった。

1969年～1970年にかけて、総合研究として生態学的研究が行なわれた。われわれは「植物的環境解析」の立場から、このプロジェクトに参加したので、その結果について報告したい。

この総合研究で、われわれの狙は、新しい山としての富士山では、安定した植物分布帯を形成しているか、森林限界線以上での植物は不安定な存在であるか、また群落の成長と標高の関係はどうか、これらのことについて気象や土壤水分の面から検討した。

気象資料だけからみると富士山の中部、上部は湿潤である。しかし土壤水分からみると上部は、下部にくらべて、いちじるしく乾燥している。また植物の生活期間、積雪などによって、かなりの規制をうけている。